

保育のグランドデザインを考える 2

○高橋 陽子 (お茶の水女子大学附属幼稚園) 小玉 亮子 (お茶の水女子大学)

1、本研究の位置付け

本報告は、「保育のグランドデザインを考える1」に続き、「保育のグランドデザインを考える2」として、お茶の水女子大学の附属幼稚園における現在のグランドデザインを検討するものである。「1」で論じた文京区立お茶の水女子大学こども園が新しく設立された園であるのに対して、附属幼稚園は145年の歴史を持つ幼稚園である。この歴史的経緯をふまえて、現在のグランドデザインについて以下で論じていきたい。

2、歴史に見るグランドデザイン「不易と流行」

本園は明治9年に創設された官営としては日本で最初の幼稚園である。当時の創設の意図は、○幼稚園の模範を示すこと○教育の発展を企画すること○女子師範学校 (のちのお茶の水女子大学) の学生の学びの場となることの3点だと言われている。文部大輔である田中不二麿が「幼稚園開設の儀伺」を最初に提出した折には聞き入れられなかったが再応伺により、設立の許可がおりている。再応儀には「良教師ヲシテ専ラ扶育誘導セシメ遊戯中不知々々就学の階梯ニ就カシムル」とあり、良き教師の下、遊びを通して知らず知らずのうちに学びの段階に就くことができる」という内容が書かれていた。現在でも、子どもは遊びを通して多くのことを学んでいくことを保育を考える中心に置き、日々の生活を積み重ねている。

保育の考え方の基本は変えない・変わらずに守り続けるべきこと<不易>としても、今、目の前の子どもたちやその時の社会の情勢など、時代時代に応じて変化すること<流行>により、保育のグランドデザインをその時々で考え改めていくという大前提をまずは押さえておきたい。

関東大震災で全てが消滅した後に現在の地に園舎を構えることになるが、新しい場所の地形を生かし、丘あり、川あり、十分に四季を味わうことのできる自然豊かな園庭を設計した。園舎は、平屋作り。6保育室は横並びで、どの部屋からも園庭に出ることができる。「外で遊びたい」と思った時にすぐに外に行くことができ、担任はどちら側も意識におくことができる環境である。丘は、今では「お山」と呼ばれ、回遊式の階段を含めいくつかの行く手段がある。最初は先生と一緒に、一番近い階段からお山に向かうが、段々と時が経ち園の生活に慣れてくると、子どもは、道を選んでお山に行くことができる。自然に大変恵まれた本園である。開設にあたって倉橋は「幼児をして十分に自然に接せしめよ」「子供をして十分に四季を知らしめよ、四季を楽しませよ」と園庭環境にも願いを込めて設計したが、その当時からの<不易>として、環境整備には気持ちをかけ、大事に引き継いでいることのひとつである。その使い方は、例えば園庭中央の花壇を初夏から夏の間は畑にする、遊具の場所を変えることもある等今、目の前の子どもたちに適した環境になるように、意味を考え、納得しな

がら変えていくこともある。

自然に限らず、当時の倉橋の考え方○子どもの実態を捉えて、子どもから出発する○自然な生活形態、生活の必要感を重視する○環境による保育、環境を通した保育を大事にする○1人ひとりに応じた対応を丁寧に重ねる、を本園のグランドデザインとしてつないできている。

3、時代時代の教育課程から見えるグランドデザイン

私ごとではあるが、本園に勤め出したのが平成6年のことである。当時は目の前のことに必死で、教育課程をじっくりと読みこむ余裕はなく、先輩の先生たちの動きや語りを真似して過ごしていたと思う。当時の教育課程は平成2年に編まれたもので、新教育要領と結び合わせて、新しい視点から捉え直したものであると当時のお茶の水女子大学長である河野重雄がまえがきで述べている。あとがきでは、当時の副園長 村石京が、次のように述べている (一部抜粋)。「附属幼稚園では、昭和39年度版を引き継いできていた。園の教育方針をしっかりと盛り込んであれば、年々内容ががらりと変わるものではない」「教育課程を重視し過ぎると、現実の子どもの姿が見えなくなる (省略) しっかりと一人ひとりの子どもを見つめ、子どもに合わせて援助指導を行うことを主眼としている」。さらに「過去から脈々と受け継がれてきた保育の心がある。これは今後もずっと引き継がれていって欲しいものであるとともに、その時代、その時に生活する子どもに合わせて新たなものと融合しあっていかなければならないと考える」とも述べられており、まさに「不易と流行」の考え方を的確に示されていると感服する次第である。

平成2年版から時が経ち、平成13年~15年にかけて、お茶の水女子大学附属小学校と一緒に、幼小接続期の研究をした際に、5つのステージ<出会い・安定・葛藤・探究・協力・創造>と4つの保育分野<からだ><もの><ことば><ともだち・なかま>をもとにした教育課程の編成を試みた。それまでの教育課程は、3歳児・4歳児・5歳児に分け、それぞれを1学期2学期3学期、その中を前期→中期→後期と分けて表記されていたが、平成15年度版は、年齢・時期ではなく、ステージという考えの基、「子どもの発達には、年齢で区切れるものではなく、行きつ戻りつしながら進んでいく」と捉えたのである。これは本園で考える「一人ひとりに応じた対応を丁寧に重ねる」を的確に表していると言えよう。

年齢・時期で区切るのではないという考え方をもう少し言及すると、「内容が先に決められていて、それに近づくように生活を組み立てていくのではない」「発達の過程の見通しを持ちながらも (省略) 一人ひとりの今を充実させていくことを第1に考えた」(140周年記念誌 第2章 本園の研究 佐藤寛子他) ということである。

幼小の研究会で、当時の子どもたちに「友達との関わり

りが広がらない」という子どもの実態が浮かび上がり、子どもたちの関わり合いに注目したのである。そうした経緯で編成された教育課程により、その後友達との関わりだけではなく、自分とのかかわりやモノとのかかわりなど関わりの視点が広がっていくことになった。

そして現在令和3年度版教育課程ができあがっているが、今回は横軸を学年、縦軸を「自分とのかかわり」「ひととのかかわり」「もの・こと（環境）とのかかわり」で示している。縦軸については、次項で述べることにするが、横軸を学年で分けたことは平成2年度版以来である。＜出会い・葛藤・探究＞という育ちの過程は、どの学年のどの子どももたどるものであることが様々な事例や学期ごとの「遊びや生活の履歴」を通して見えてきた。社会に広く問うためには学年で分けることでわかりやすくなること、3歳入園の時の接続や小学校への接続について考えやすくなったこと、それに伴い4歳、5歳への接続についても大事にしたい観点が明確化されたことなどの効果もあると考えている。

4、教育目標の改訂について

長い間本園の教育目標は○からだが丈夫で元気がよい○自分のことは自分でする○友だちと仲よく遊ぶ○ものごとにいっきとした興味をもつ○思ったことははっきり話し、人の話をよく聞く○創意工夫したことを楽しんで表現する、の6つを掲げていた。子どもは自ら育とうとする力があり、大人が内容に合わせて目標に近づくようにさせるのではないという本質的な部分で、教育目標に違和感を持ったことから、子どもたちにどのような願いをもって保育の実践を行うのかを教員で考え直すに至った。子育てに戸惑い、不安のある親に育てられている子どもたち。情報の波にのまれてしまいそうな親子の関係。その中で、まずは「あなたはとても大事な存在である」と伝えたい。自分が大事にされていることを十分感じること、周りの人のこと、環境のことも大事に考えられるようになっていく、そういう願いをこめて、○自分を大切にする○周りの人を大切にする○環境を大切にする、という3つの願いをたてることにした。これは決して、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿ではなく、その後の生き方にも通じる「子どもへの願い」「人としての願い」であると考えた。この気持ちを持っていれば、この先どんなコミュニティに属した際にも、その人らしく、人やものや環境などと関わり合って生活していくことができると考えている。

前項で教育課程の縦軸のことに触れたが、3つの願いの視点で子どもの姿を捉えようとした結果である。

5、そして今、大事にしていること

前述したように、教育課程は子どもの姿やそれまでの実践や研究に基づき、社会の変動にも合わせて編成をしている。試行の段階で、保護者に「子どもへの願い」に変えたことについてどう思うか、アンケートを取った。

「シンプルで伝わりやすい」「子育ての中で大切にしたいと感じていることだと共感」「子どもを中心に据えている」という声や「漠然としていてわかりにくい」「解釈が様々になるので説明が欲しい」などが聞かれた。本園研究主任杉浦は「具体的ではないが、子どもたちを中心に

して、これだけ幅広く考えを巡らせるきっかけになった。具体的なことは、子どもたちとの関わりの中で考えていくことなのかもしれない」と保護者に投げかけていた。子ども一人ひとり様ではないこと、子どもと考え合い創り出していくことの大切さが伝わることを願う。

子どもたちが安心して園生活を送るためには、まずは保護者の安心も保障することを考えている。本園やお茶の水女子大学内にあるナーサリー、こども園、同区立の幼稚園や保育園の3歳児の保護者に「子どもの生活と保護者の子育てに関する意識調査」を行った。それにより見えてきた親の不安や期待に少しでも応えるために、「育育手帖」という小冊子を作成し、入園前保護者に配布した。面談やちょっとした伝え合いで子どもを真ん中に置いて語り合うことができたように思う。

教員側としては、ナーサリーやこども園と一緒に3園合同研究会を開催したり、2歳児保育に関わらせてもらったりする中で、具体的に2歳児の様子を知ったり、教師の関わりを学んだりして、入園時期の保育に活かすことができていた。

「安心」を保障するために、初の試みとして入園後しばらくの間、登園時間を他学年より遅くする、クラスの半数ずつを隔日で保育する等を行い、落ち着いた雰囲気遊び出せるようにした。

他園でもされていると思うが、副園長と保護者の懇談タイムも、双方にとって貴重な時間となっている。誕生会後に行うため、異年齢の保護者が会することになり、成長の見通しが見えたり、成長してきた軌跡が見えたりして、思いを伝え合っている。保護者の不安や悩み、嬉しかったことなども聞くことで、担任や園と共有し子どもの見方や関わりを考えるきっかけになっている。生の声を次の小冊子作成に活かす予定である。5歳児保護者からは「今までの成長を感じるが、小学校では大丈夫か」という声が聞かれ、小学校教員にもアンケートを取ったり話し合ったりして、幼小接続期を丁寧に考え幼稚園卒業時向けの小冊子作成も考え出している。

以上のように考えてくると、保育のグランドデザインを考えるにあたっては、○入園前の実態を把握し、必要なことは前もって保護者に伝える○保護者とは子どもを中心に置き語り合う○わかりやすく丁寧に、子どもの姿や園の様子、研究のことを保護者に伝え、やりとりを重ねながら一緒にデザインする○保護者同士の語り合いの場を設けそこで得た内容をカリキュラムなどに生かす、など、安心をキーワードに家庭と一緒に創り出していく、そういう時代になっていると思われる。教育課程や「子どもへの願い」も、保護者と子どもと園と考え合うその時間が大切なのだと考える。

今回は触れられなかったが、新型コロナウイルス感染症感染防止対策に伴い、行事の見直しや保育時間など数々の見直しも行ってきている。保育の考え方の基本は変えない・変わらずに守り続けるべきこともあるが、時代や目の前の子ども・保護者に合わせて柔軟に保育を考えていくことを大切にしたい。そして、まだまだ社会全部に開かれていないわけではないが、保護者に開いたように、これからは、近隣地域から社会に向けて発信を続け、やりとりを重ねるような、結果ではなく過程を大切にするようなグランドデザインを考えていきたいと思う。